



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Representing Race : The Body and Racialization in Japanese Women' s Media, 1960s-1980s [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	PELLICANO', Elisa Ivana
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	甲第15805号
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/92058
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Pellicano_Elisa_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）

氏名：ペッリカノ・エリーザ

審査委員	主査 教授	浜井 祐三子
	副査 准教授	増田 哲子
	副査 准教授	パイチャゼ・スヴェトラナ

学位論文題名

**Representing Race: The Body and Racialization in Japanese Women's Media,
1960s-1980s**

（戦後日本の女性メディアにおける「身体」の表象—「人種」を中心に—）

ペッリカノ・エリーザ氏への学位論文審査（口頭試問）は国際広報メディア・観光学学院 407 会議室において、令和 6 年 1 月 9 日午前 10 時半からの約 1 時間半に渡って行われた。まず、学位申請者であるペッリカノ氏から論文についての発表が 30 分ほど行われ、続いてまず主査から、次いで副査 2 名から順にコメントと質問がなされ、それぞれに対する応答が続いた。

まず主査からは、本論文が日本における人種意識の構築に関わる研究であり、申請者が研究を始めた 5 年前には研究視角として稀だったものの、近年一般学術書の出版などでも取り上げられることが増えており、関心の高い分野であること、本論文の特徴として①女性誌というメディアに現れる身体の表象をテキストとイメージの質的な分析手法で扱う研究であること、②30 年という長いスパンを扱う歴史的な研究であること、③「人種（化）」という概念を軸に据えた研究であることが指摘され、その 3 点を中心に本論文の学術的意義を評価していくことが示された。

主査からの質問として、本論文がこれまで十全に扱われてこなかったタイプの資料（女性誌）を扱ったことや、30 年という長い対象期間の設定を行ったという、主に資料面での新しさの他に、どのようなオリジナルな貢献を学術研究として加えることができたのか、という点について質問がされた。申請者はこれまでの研究は例えばミックスのようなマイノリティへの差別という観点からなされることが多く、その着目は当然重要ではあるが、一見して差別と思われないような日常的な言説、特にここで扱われる美容やファッションをめぐる言説実践の中に「人種」や民族の差異に基づく他者化が着実に進行していたことを示すことができた点を強調した。また、ミックスに関しては「スティグマ化から賞賛の対象へ」といった単純な変化ではなく、より複雑な位置付けが行われたことも明らかにできたと述べられた。次

に、この1960年代から80年代という長期の時代設定によって扱うメディアの種類が限られ、政治社会的背景との関連の議論や間メディア的な分析ができなくなったのではないかと、もし5年前に戻るとしたら同じ時代設定で分析を行うかという質問に対しては、確かに時間的制約もあって分析の深みや他の種類のメディアへの視点が十分でなかったという反省もあるが、やはり30年を見たことで通時的な変化として見えてきたものもあり、確実に意味があったという返答がなされた。最後に、今後の研究の方向性を尋ねる質問がなされ、次の研究でまず1950年代から1960年代をより掘り下げる研究を行いたいこと、またそれとは別に映像メディア（テレビなど）の分析も行いたいこと、また今回の分析の関連で紙幅もあって十分展開できなかった「場所」（例えば外国人居留の歴史を持つ横浜や神戸など）の表象にも興味を持っていることなどが示された。

次いで2名の副査からコメントと質問がなされた。共通して、幅広い資料を扱った力作であるという評価がなされた。また1名の副査からは、広告などエフェメラルなものを掘り上げるという史料的价值もある研究であるという評価もあった。その一方で、これも共通して、本研究において「人種化」の概念が十分に議論・定義されたのかという点について厳しい質問が投げかけられた。具体的には、理論的枠組みとして、「人種化」が必ずしも明確な身体的差異の存在しないところにも生じることが示唆された一方で、本論文が身体的差異の表象への着目に拘ったことに問題はなかったのか、マイルズなど他の研究者の定義に頼ってしまったことは適切だったか、「白人」系の「外国人」や「ハーフ」（ミックス）への着目が議論の中心となったことで、より複雑な分析となるはずの日本人以外のアジア系（例：中国系モデル）の事例や「黒人」系ミックスの議論が周辺化される結果となったのではないかと意見が述べられた。この指摘に対して、申請者から「人種化」概念を用い、身体的差異に着目する必要性について改めて説明がされつつも、分析の範囲が最終的に狭くなってしまった（初稿の段階ではアジア系や「黒人」系に関わる分析がより多くあったものの、整理の過程で削られた）点を認め、今後の研究に活かして行きたいことが述べられた。同時に、今後も同一の研究課題を進める上で、さらに分析概念の定義を明確化・精緻化する必要があることも確認された。今後の研究の方向性に関しては、副査の1人からより広い年代を通じて戦後の日本人意識が形成された過程を見る必要性が指摘され、申請者からも1950年代が実は人の移住や交流という観点から興味深い年代であり、その点は今後の研究でぜひ掘り下げて行きたいということが応答された。

申請者退出後、審議が行われた。今後の研究においてさらに分析概念を明確化し、また研究視角（他メディアへの着目、時代設定）を拡大させていく必要があるものの、従前の研究では十分に扱われてこなかった資料を幅広く用い、まとめた力作であること、審査で指摘された点を申請者が真摯に受け止め今後の研究に活かしていく姿勢が審査のやりとりから感じられること、全体として本論文が博士研究の水準に十分達する研究であることが確認され、審査員は一致して合格の判断となった。